

備陽史探訪

第 96 号

発行
備陽史探訪の会
福山市多治米町5-19-8
TEL (0849) 53-6157

坂本龍馬と

いろは丸事件

会長 田口 義之

慶応三年（一八六七）四月二三日の深夜、瀬戸内海の讃岐国（香川県）箱ノ岬沖の海上で蒸気船同士の衝突事故が起こった。土佐海援隊のいろは丸に、紀州和歌山藩の軍船明光丸が衝突、いろは丸が沈没したといわれる「いろは丸事件」である。

土佐海援隊は、坂本龍馬が土佐藩に働きかけて設立された日本最初の貿易商社。そして、いろは丸には龍馬自身が乗船していた。ここからこの事件は、当時としては珍しい、「万国公法（国際法）」を振りかざした「海難審判」に発展していく。

事件そのものは双方に非があり、当時の万国公法からいえば、いろは丸に分が悪い。なんとすれば、明光丸はいろは丸の右舷に衝突しており、当時の万国公法に違反していることが明白であるからだ（当時の国際法では、互いに反航する船は衝突

の危険が迫ったとき、右に舵を切る事になっており、いろは丸が左に舵を切らない限り、明光丸がその右舷に衝突することはあり得ない）。

最初の談判は、鞆を舞台にして行われた。龍馬以下の土佐海援隊は石井町の榎屋清右衛門宅に宿泊し、円福寺を根城にした紀州側と、福禪寺対潮楼などで数日間の折衝が行われたのである。その焦点はもちろん何れに非があるかであったが、交渉はなかなか進展しなかった。紀州側が「御三家」の威光を振りかざし、土佐側の言い分を聞き入れようとしなかったのである。

一方、龍馬側も引くに引けない立場にあった。実は、いろは丸は海援隊の持船ではなく、伊予大洲藩から一五日間五百両の契約で借りた、いわばチャーター船であったからだ。当時のことだから海難保険などありはしな

い。他人の船を沈めたら自分で弁償しなければならない。これが龍馬を執拗に紀州側の非を鳴らし、同藩から賠償金を取ろうとした理由だ。

結局、この交渉は舞台を九州長崎に移し、紀州藩が土佐海援隊に八万三千両の賠償金を支払うことで決着したが、龍馬自身にとっては決してプラスになるような出来事ではなかった。

まず、幕末のこの時期、龍馬は一ヶ月もこの事件に煩わされて政局に関わることが出来なかったことだ。こ

れは歴史の表面には出てこないことだが、彼の政治力から考えれば、いろは丸事件は当時の政局に微妙な影響を与えたと言える。

また、もっと深刻な影響は、彼自身の命に関わることであった。龍馬はこの年十一月十五日、京都で暗殺されるが、暗殺者の背後に紀州藩の陰がちらつくのである。真相は数の中だが、もし暗殺の陰に紀州藩があるとすれば、この事件は単なる海難事件どころか、幕末の政局を左右した歴史的事件となるのである。



坂本龍馬像 靴をはいているのがよくわかる。

平成十二年度前期

城郭部会城跡調査報告

小林浩二

城郭研究部会は檀上本「備後古城記」を底本として、備後の中世城館遺跡の研究を行っている。

当初は田口会長や出内部会長の解説を聞く机上の勉強会だったが、数年前から各部会員が受け持った城跡について文献を調べ、現地調査をして、毎月の研究会において、その成果を発表している。

☆三次市畠敷町の城跡

三次市には約五十個所の山城跡があるが、その大半は昨年調査を終了しており、畠敷町周辺の城跡が今年度最初の現地調査となった。

中世には南畑敷・四十貫の両村を含む地域を畠敷村と称した。この畠敷村には、中世の三次地方を支配した三吉氏の本拠比叡尾山城があり、三次地方の中心となっていた。

最初畠敷に入部した三吉氏は鼓氏系図によると、近江宇多源氏の佐々木秀綱が建久三年(一一九二)、三次の地頭職を得て比叡尾山城を築き居住したのが初めという。しかし、秀綱の子秀方は承久の乱(一二二一

年)の時、後鳥羽上皇方に属して戦死し、秀方の幼児高元は母に抱かれて伊予能島へ逃れたという。一方、

「芸藩通志」や「三吉町国郡志」の三吉氏系図では、平安中期の三蹟として名高い藤原行成の四男兼範が安房国より下向したとし、彼を三吉氏の祖としている。両系図は矛盾しているが、双方とも素直に信じる事は躊躇せざるを得ない。この三吉氏が没落したあと、藤原姓を名乗る在地の豪族が三吉氏を称し、次第に勢力を拡大していったと思われる。

元弘三年(一一三三)、後醍醐天皇が、隠岐を脱出して伯耆国船上山に入ると、備後からは江田・広沢・宮・三吉氏がこれに馳せ参じている。南北朝期、三吉氏は尾道浄土寺領の櫃田村(現又三郡君田村)や地毗庄(現庄原市一帯)へ侵入を繰り返し、勢力の拡大を図っている。

応仁の乱には西軍に属して戦い、戦国時代には初め尼子氏に従って毛利氏と対立したが、天文一〇年(一五四一)尼子氏が吉田(現高田郡吉田町)の郡山城の合戦に敗退したのを機に大内・毛利氏に従った。天文一三年の布野合戦の時、三吉広隆は大勝利に酔う尼子軍を奇襲して敗走させた。その後も毛利氏に属して各地に転戦したが、関ヶ原の戦いに敗

北して毛利氏が防長に移封されると、高元は京都において出家し断絶した。

た所にも館跡と思われる平地があるが、畑跡とも考えられ断絶しがたい。

調査日 一月九日(日)

参加者◎坂本敏夫・小林浩二・佐藤

錦士・高橋辰己・寶龜雅郎

(◎印は調査担当者以下同)

▼ハチが壇城跡

ハチが壇城跡は比叡尾山城跡の東方二キロメートルに位置し、「芸藩通志」に「天文年中尼子と合戦の時比叡尾山城から山中・藤名、岡部等の家臣を八千壇に出して防ぐ」とあるのが、この城跡のことであろう。城跡は比高一六〇メートルの丘陵頂部にあって、周囲を土塁と横堀で囲み、虎口部では土塁を食い違いにしているが、内部は緩やかに傾斜した自然地形のままである。東側から北側にかけての防御は堅いが、南西部は防御施設が不十分である。この城は合戦の時急遽構築され、その後は使用されなかったものであろう。

調査日 一月一六日(日) 小林浩二 坂本敏夫・寶龜雅郎

▼福谷山城跡

福谷山城跡は比叡尾山城跡の西方二キロメートルの地にあり、「芸藩通志」によると、城主は三吉氏の家臣泉三郎五郎久正という。

城は主郭を中心とする郭群と、主郭の背後北東に延びる尾根筋の郭群、

比叡尾山(標高四一〇メートル)の頂上にあり、比高二二〇メートル、

南北有数の規模を誇る山城である。

前期三吉氏(佐々木流)は承久の乱に敗れ没落したというが、鎌倉初期の頃、このような高地に城を築いたとは考えられない。比叡尾山城の初期築城年代は後期三吉氏(藤原流)が南北朝期に櫃田村や地毗庄へ侵入し勢力の拡大を図った時期と思われる。その後、戦国期に拡張補強したとみえ、一部石垣を積んでいる。

天正一九年(一五九一)に三吉広高が比叡尾山城を築いて移り、この城は役目を終えた。

城跡は独立丘陵に構築されており、最高所の主郭は七〇メートル×四〇メートルの規模で北と東を土塁で囲っている。北西の角に入り口があり、井戸も確認できる。南側は石垣を築いた枡形の構えになっており、

戦国期の修築と思われる。ここから南に下る尾根に階段状に多くの郭を配置している。この尾根に平行した東側の一段低い尾根には、北端に掘切と堅堀を設け、南に家臣団の屋敷跡と伝わる郭が階段状に並んでいる。主郭から北東へ約二〇メートル下つ

主郭から南へ一〇メートル程下った尾根に出郭と思われる部分とで構成されている。主郭の背後は備後北部に多く見られる大型の堅堀と二本の小型の堅堀、変形柵型を備えた堀切を設けて防備している。主郭背後の郭群の先端部は防御施設が不十分であり、未完成だったと思われる。出郭は北側に堀切と土塁を設け、南側には内柵型の虎口を構築している。

面した丘陵上に構築されている。この地域は高橋氏が支配していたが、大永五年（一五二五）毛利元就が防長の大内氏に属した時、高橋氏も尼子氏から離反した。このため、享禄元年（一五二八）尼子氏の命で赤名氏は作木に攻め入り、森山などを奪い取った。永禄三年（一五六〇）毛利氏の出雲攻めの際、赤名氏は毛利氏の支配下に入り、この地域は毛利方の勢力範囲になった。

☆双三郡作木村の城跡

作木村は双三郡の西北端に位置し、明治二年（一八八九）上作木・下作木・岡三淵・森山中・森山西・森山東・大津・香淀・門田・大畠・伊賀和志・光守・西野・大山の十四カ村が合併して成立した村である。

作木村南部の上佐久木・下作木・香淀・門田は三吉氏の支配下で、この地域の山城は全て北に備えた防御体制になっている。香淀・門田の山城は岡田氏や証野氏の居城と伝えられているが、彼等は農民から成長した地侍で、三吉氏に従いその配下になったものである。『陰徳太平記』は上

作木の作木新右衛門が天文二年（一五五三）の泉合戦で尼子方の米原左馬允を討取り、これに勢いを得た毛利軍が大勝したと記している。作木村北部の森山・大畠・岡三淵は尼子氏の支配下にあり、山城は南

▼堀江山城跡

大字門田の比高九〇メートルの丘陵先端部にあり、南北七〇メートル・東西一五メートルの小範囲の中に四つの郭があり、前後を堀切で防御しただけの単純な縄張りで、郭内には不整形な箇所も見られる。城主は岡田氏と伝えられる。

▼衣掛山城跡

大字門田にあり、別名竹屋山城という。丘陵頂部の山城遺構部分と丘陵先端の居館遺構部分で構成されていたが、先端部は最近の土砂採取により消滅している。頂部の郭群は大きくは二つの郭からなり、下段の郭には方形の井戸跡がある。背後の尾根を二条の堀切で遮断し、堀切の東斜面に二条の堅堀、西斜面に一条の堅堀を設けて防備している。主郭の南北斜面にも一条ずつの堅堀が見ら

れる。城主は証野氏と伝えられる。調査 二月一三日（日）福谷山城跡 堀江山城跡・衣掛山城跡

◎高橋辰己・小林浩二・坂本敏夫・佐藤錦士・寶龜雅郎

▼松笠山城跡

大字森山中にあり、地元では城山といわれている。南麓からの比高一七〇メートルの、いわゆる男山といわれる独立した地形であるが、東西南北を接近した山に囲まれている。遺構は頂上部に二段の郭があり、東

の尾根筋を一条の堀切で遮断しているだけの単純な縄張りである。『芸藩通志』には「高岡一族の所守」とあるので、歌田山城主高岡氏が領有する谷の入口に監視所として築いたものであろう。

調査 三月三十一日（金）◎小林定市

▼比丘尼掛城跡Ⅱ

大字森山中の比高五五メートルの丘陵先端部に構築されており、最高所の郭から西と東に郭を配し、東北と南東の尾根続きは堀切で敵の侵入を防いでいる。

城主は高岡氏と伝えられる。

▼比丘尼が城跡

村内最北端の大字岡三淵にある山城である。南北九〇メートル・幅一〇・一五メートル・高さ三・四メートルの丘で、ほぼ中央を道路で分断

されているが以前はつながっていたという。防御性は乏しく館城だったと思われる。遺構の南麓には城主の子孫で、江戸時代は庄屋を勤めた三上家の屋敷跡があり「殿敷」という。

▼松前城跡

丘陵先端部の遺構跡は数年前、梨畑として開墾され全壊している。調査 六月十五日（日）比丘尼掛城跡Ⅱ・比丘尼が城跡・松前城跡

◎小林浩二・坂本敏夫・高橋辰己・寶龜雅郎

▼☆双三郡布野村の城跡

布野村は明治二年町村制施行により横谷・上布野・下布野・戸河内の四村が合併して成立した。

康正二年（一四五六）造内裏段銭并国役引付に「三貫五百八十二文三吉大郎殿 備後国布野郷段銭」とあり、中世この地方は三次の三吉氏に属していた。天文一三年（一五四四）の布野合戦の時、三吉広隆が尼子軍を奇襲し敗走させた。合戦の様子は『陰徳太平記』や『安西軍策』に詳しく記述されている。

▼姫ヶ嶽城跡

下布野の高丸山から北東に派生した丘陵頂部を削平して構築されており、後期山城の特色をよくとどめている。四〇メートル×一五・三五メ

ートルの主郭の南西端に長さ四〇メートル・高さ一メートルの土塁が残り、中央に櫓台状の高まりと井戸が見られる。二郭内には石組井戸が残り、そこから東北に延びる尾根上には六段の郭と先端部に堀切・堅堀が構えられている。主郭下の郭群と二郭下の郭群の間には谷が入り、二か所に石組井戸が現存する。

▼狐城跡

姫ヶ嶽城から谷一つ隔てた丘陵の先端にある小規模の山城で、『布野村誌』は姫ヶ嶽城の出城としている。大きく三段の郭で構成され、最下段は神社の境内地として利用されている。最高所の郭は一九九四年に発掘調査が行われ、柱穴等が確認された。調査 三月二八日(火)

姫ヶ嶽城跡・狐城跡

◎矢野恭平・石森啓喜・岡田道章

☆双三郡君田村の城跡

君田村は双三郡の最北端に位置し、明治二二年櫃田・泉吉田・東入君・西入君・藤兼・石原・茂田の七村が合併して成立した。

貞和元年(一三四五)足利尊氏は「櫃田村地頭職」を浄土寺(現尾道市)へ寄進したが、その後再三周辺武士団の侵略を受け、備後国守護職

細川氏は守護代に侵略を取締まるよう度々命じている。文明一七年(一四八五)櫃田村の百姓は三三名の連署で、武士の代官は拒絶するという起請文を出して、浄土寺から「武家之代官職事、不可致契約候」という約束を取付けている。

泉吉田村は隣接する恵蘇郡大月村(現比婆郡口和町)の黒岩城主泉氏の支配下にあった。

入君村の八幡宮は天文年中三吉氏が勧請した神社で、御神体背面に文禄五年(一五九六)三吉広高再興とあり、三吉氏がこの地域を支配していた。入君村は寛文一一年(一六七二)東入君村と西入君村に分村した。

▼道迫山城跡

君田上小学校の裏山で地元では大仙山と呼ばれている。独立丘陵の東西の頂部にそれぞれ郭を一つずつ設け、その間の鞍部も平坦に仕上げている。北と南の斜面にはそれぞれ二条の堅堀を設けている。

城主は吉田氏と伝えられる。

▼三熊山城跡

大字櫃田字中野原にある。岩敷山から西南に半島状に延びた自然の地形を利用して築かれており、その麓を神之瀬川が迂回して流れている。

城は二つの郭からなり、先端部と背後に堀切を備えている。

城の麓に城主小滝弾正の墓といわれるものが存在している。

▼橋爪山城跡

櫃田字沓ヶ原の中国電力沓ヶ原調整池のダムより上流三〇〇メートル、旧小野氏宅の上の小さな半島状の尾根にある。

尾根先端部に一五メートル×一〇メートルの郭を削平し、背後の西側尾根続きを土塁と堀切で区画しているだけの単純な構築である。

沓ヶ原地区は神之瀬川筋の交差点にあたり、交通の要衝だったので、見張所として築かれたものであろう。調査 五月一日(月)道迫山城跡・三熊山城跡・橋爪山城跡

◎岡田道章・石森啓喜・矢野恭平

▼能山城跡

大字石原上迫にあり、別名石原城という。

比高五十メートルの丘陵先端部に五十メートル×二〇メートルの主郭と、一段低い二郭、尾根先端の四段の郭で構成されている。二郭内には直径二メートル深さ五メートルの石組の井戸が残っている。主郭の背後(北側)に一条の堀切とその北側の東西両斜面に畝状堅堀群を設けている。この城の表と側面は人を寄せ付けない程の急斜面であるが、北側の

尾根は緩斜面である。この弱点を畝状堅堀群と幅一〇メートルの堀切、その上の主郭までの四〇メートルに及ぶ急斜面は見事に補っている。

城主は尾崎氏と伝えられる。

▼本亀城跡

大字西入君字永峯にあり、別名永峯城という。高幡山(六六四メートル)から南に延びた丘陵が神之瀬川の右岸までせまり、西は深い谷間によって自然の要害になっている。

比高一二〇メートルの最高所の郭は二〇メートル×二〇メートルで、背後の尾根を二条の堀切で断ち切っている。主郭から丘陵先端部に向かって七つの郭が階段状に並び、その下の鞍部には西麓からの大手道が入り込み土塁で囲まれた虎口が築かれている。鞍部を越すと四メートルの高さで土塁を備えた郭群があり、その下には二条の堅堀が見られる。

城の規模は大きく、主郭から先端まで約二三〇メートルあり、尾根の東西両斜面は絶壁状で、東麓を神之瀬川が流れ自然の堀の役割を果たしている。三吉氏がこの城を重要視していたことが伺われる縄張りである。調査 七月二日(日)

能山城跡・本亀城跡

◎寶龜雅郎・小林浩二

深安二十六社の神社めぐり

種本実

ブォー、ブルブルーン、五〇ccのバイクは今にも破裂寸前である。県道神辺―三谷線の峠越えは愛車に酷だったようだが、ここまで来ては後には引けない。

やつとのことで峠を越えると、左手に幟が見えて目指す「安那明神社」はすぐ分かった。檜の太木から続く参道に鳥居と拝殿が見える。拝殿横に佇む狛犬は両前足を玉に乗せている。「狛犬をさがして」(橋本万平著)によれば、この姿は瀬戸内地方に多くみられる形で、「尾道狛犬」と呼ばれている。

拝殿・本殿をぐるりと回りカメラに収める。天平勝宝五年(七五三)の創建と伝わり、祭神は天津彦瓊瓊杵命、大己貴命、事代主神というから由緒ある神社である。

今でこそ草深い過疎地ではあるが、千三百年も前のこの辺りはどんな地であったのかと思いがよぎる。安那郡の中心地であったかもしれないし、その産土神としての「安那明神」ではなかったかと想像する。この神社の境内も静寂そのものであり、真夏の照りつける日差しの中にひっそり

と佇んでいる。

来た道をUターンして中条の八幡神社へ。二ヶ月前の「親と子の古墳巡り」の際、現地集合場所であったのがこの八幡神社であった。神社の境内に「深安神社巡り」と書かれた幟が何本も立っていたのを見たのがきっかけで、今日のような神社めぐりをするようになったのである。

それまでも神社に関する興味は少なからずあった。過日、「京都狛犬巡り」という本が朝刊で紹介された。著者は龍谷大学助教授の古寺良昭氏で、狛犬の研究を始めて十年になるという。五年前には京都南部の一五〇対の狛犬を調査して『狛犬学事始』を出版している。

私も、会の例会などでいろいろな地域の神社に参拝し、狛犬にも随分出会ってきたが、注意して眺めたことはなかった。こんな研究テーマもあるのか、これからは神社に赴いたら狛犬の観察も欠かすまい、と目からウロコの思いであった。

そんな矢先に「深安神社巡り」の幟に出会ったのでさっそく、六月初旬の日曜日から四回に分けてやつとこのほど、神社めぐりを終えた。

出発は何といっても神辺駅そばの式内社・元県社の「天別豊姫神社」である。ここで「広島県神社庁深安

二十六社」の地図を戴き、これをもとに福山市の加茂・駅家町を含む深安二十六社を巡ることが出来た。

昭和二十年に国の統制を離れた神社は、伊勢神宮を本宗とする神社本庁を設立し、八万の神社が所属した。深安二十六社に選ばれた神社は、元村社以上の社格を有するものであるという。

二十六社を巡ってみて、それぞれの神社の特色印象などを事細かに綴るには整理不足であり、今脳裏に浮かぶ雑多なことを記してみたい。

▼狛犬について

天別豊姫神社の拝殿と本殿の間、幣殿の側に立つ狛犬は、頭髪が渦巻いていて巻貝をちりばめたようである。足元には子供を連れている。

宮司さんに尋ねると、大戦中、大陸から贈ってもらったものとのこと。倉神社(福山市加茂町)には、左前足を玉に乗せた狛犬が立つ。

賀茂神社(福山市加茂町)では、三対の狛犬に出会った。頭を低く尾を背中に掲げたもの、前足を伸ばしたもの、手水舎へ前足を乗せてたつものなど。

▼祭神は室町幕府ゆかりの人物

房丸神社(福山市加茂町北山)：足

利幕府十一代將軍足利義澄の孫足利房丸が当地に隠棲、歿。その霊を祀つたもの。

▼大社などの分霊を勧請したもの
日枝神社(神辺町湯野)：近江国日吉大社の分霊を勧請。

岡山神社(神辺町道上)：備中国吉備津神社の分霊を備後国、現新市町吉備津神社へ勧請の節、当地で一泊した跡地。

天満神社(神辺町徳田)：難波津の天満宮を勧請。

八幡神社(神辺町下御領)：宇佐八幡宮より勧請。国分寺の鎮守社であった。

神社とは何か、神社巡りの道中いつも自問自答しながら歩いてきた。難しく考えなくとも、ともかく祖先から連綿と受け継がれてきた文化財であると言える。寺院のように、宗派や教義はない。しかし、鳥居や本殿には建築様式があり、時代や地域によって特色がある。それらを観察しながら、古来から太陽、風雨、山川など自然を崇拝することから始まった神道の素朴な心を、一時でも科学文明に洗脳された私たち現代人が取り戻すことが出来たら幸いである。同行の士を求めたい。

ホルンベルク城

石井 しおり

今年四月、時雨れつつ咲く花の福山城を後に、約半月、レンタカーによるドイツ古城訪問と、ベルリン付近の旅に発った。成田よりフランクフルト着。空港内でドイツ籍のディーゼル車19730に乗り込んだ。

まずフランクフルトから温泉地のヴァイスバーデン、コブレンツ、トリアーからルクセンブルグ公園を通り抜けてフランス領メッツへ。続いてナンシーからベルダン要塞に廻り、ジャンヌ・ダルクの生誕地ドンレミ村へ。なお東進してストラスブル、コマルへ。さらにライン川に沿って北上、ドイツ領に入り、バーデン・バーデン、カールスルーエ、次第に山岳に入り、ハイデルブルグ、ハイブロン、ローテンブルク、ニュールンベルク、バンベルク、ドレスデン、ベルリンと。ここでレンタカーを降りる。走行二五〇〇キロだった。ベルリンの旧東ドイツ側にあるヒルトンホテルで四泊、その間驚異のベルガモン博物館、ナチス収容所跡、われわれの頭脳深く刻むポツダム、菩提樹の並木ウンター・デン・リンデン等を見学した。

旅中で悲惨な交通事故・迷い子にならかけた恐怖など、劇的な日々が続いたが、最も名状しがたい恐怖の体験をしたホルンベルク城、別名「恐怖の城」を思い出す。

それはライン川に沿って北上し、カールスルーエから山岳地帯に入り、道の迷いながら尋ね廻った末、親切なご夫妻の先導によって、やっとハイブロンに辿り着き、ホルンベルク城を見上げたのは午後八時近かった。

ここはネッカー川の渓谷で、十二世紀頃から群雄割拠の領主達が、覇権を争った土地柄であった。中でも十五世紀に君臨した片腕の「鉄腕ゲッツ」はゲートの名戯曲に登場し、有名である。幾度遷ののち、一四四九年以来、ゲミンゲン男爵家の所有となった。男爵家は今十一代目、戦禍と老朽に崩れた城の補修を重ねながら現在に至り、今はレストランとホテルを経営する。断崖に老いて立つ古城は、外郭を見るだけでも戦禍と、幾代もの血塗られた歴史を思わせた。

何しろ到着時間が闇の迫る頃、天を突く黒い森の上に月は澄み、鳥の羽ばたきが静寂を破るのみ。フロントでゲミンゲン家当主夫人にお目にかかり、いろいろ説明を聞

く。五十年配の男爵夫人は能動的で、片手のメモを見ながらテキパキと旅人を案内し、他の棟へ行かれた。ご主人の男爵はドイツ銀行東京支店へ勤務されたご経験もある由。

やっと車のトランクから、荷物を引きずって自室へ。廊下は次第に階段ごとに上階に登る感じ。

磨りガラスに金線で縁取りしたドアを引くと、まず左が浴室とトイレ、ドアから真つ直ぐ三段昇ると寝室があり、ベッド・木製のロッカー・小さな机・椅子、壁に十字軍の戦闘風景が現代の色彩で画いてある。壁の三方に五〇センチもある壁土を挟った小窓があり、鉄棒が渡りあつた。手狭なこの部屋はその昔、兵士達の見張り塔だったのかも知れない。

窓から天空を見ると、空に間近な星、地底にはネッカー川が鈍く光る。とにかく汗を洗い流そうと、屋根

の傾斜した浴室に入り、湯のネジを捻る。小さな窓から外を見ると、遠い丘の小さな灯がにじみ、何か「気」のようなものにとらわれた。浴槽に入っても一向湯上がりの温もり感がない。急に背中に濡れ手拭を張られたようゾクゾク感がする。小さな化粧台の灯が翳る。もう我慢も限界、飛び出してベットの毛布を引っ張り倒れ込んだ。

どの位過ぎただろうか。ドアを密かにノックする音。

「お支度はできましたか。晚餐にかけましょう」と救いの神ならぬけい子さんの声、

地獄で仏に会った如く部屋に招き入れた。

少し歩いて別棟のレストランへ行く。降るような満天の星、黒々と立つ森の中から夜鳥の声が聞こえる。がけの上の馬屋を改装したこの席は、眼下にタグボートに引かれた船が、舷側灯を光らせながら遡上する。かすかな汽笛の音が夜気を震わせた。

まず、ホルンベルク城の自家製ワイン白で乾杯、当家は広大なぶどう園を持ち、熱心な醸造家でもある。子牛のソテー・ラムステーキ・アスパラガスのスープなど、当家ご長男のシェフの腕も確かであった。

ワインが心地よく身体を巡る頃、ひでゆきさんが

「ここは幽霊の住む城といつて有名なんだよ、それは古くからの言い伝えなんだが、お母さん何か変わったことはなかったか」と。

さては亡霊の仕業なのかと、私はロココ風の椅子からずり落ちそうになった。恐怖に見舞われた、本当の旅中の体験である。

平成十二年四月二十一日

亀形水槽をめぐる

門田 幸男

いま飛鳥で発掘された亀形水槽（以下「亀形石」と表記）の話題でにぎわっています。今回は、まず、この「亀」の意味を陰陽五行思想で読み解いてみたいと思います。

陰陽五行では、各方位に生き物（神獸）が配置されています。皆さんよくご存じだとは思いますが、いちおう確認しますと、東が青龍、南が朱雀、西が白虎です。そして北に配置されているのが、「魚介類」の「介」つまり甲羅とか殻をまとった生き物で、その代表が玄武です。もちろんこれらはすべて想像上の生き物で、龍が大蛇に足や角を付け足したものであるのと同様に、玄武は大亀に蛇を付け足した形をしています。

話は変わりますが、以前東大寺の修二会について書いたことがあります。このお水取りの水は、奈良の真北にある若狭の神宮寺からわざわざ運ばれます。この地の若狭井で汲まれた水ということになっています。詳しい説明は省きますが、呪術的には、修二会で使われる水は、北から来たもの、水は北で生まれ、そこから流れて来るものと観念されています。そして、その北にいる神獸こそ

玄武＝亀なのです。

今回発見された亀形石は、実物の亀より丸い、白い、そして当然ですが、堅いものです。陰陽五行思想では、この「丸」「白」「堅」三拍子揃ったものを「六白金氣」とし、八卦では「乾」にあたり、自然界に対応させると「天」になります。

水を生む雨は天から降ってきます。また、これは「金生水」という陰陽五行の原理によっても裏打ちできます。水の湧き出る場所が、なぜ亀でなければならぬのか、その問いはこれで解決すると思います。

さて、発掘された遺構は斉明天皇の時代だろうという意見がほとんどです。そこで、皇極・孝徳・斉明・天智朝と順に『日本書紀』をたどっていきますと、斉明天皇の弟である孝徳天皇大化五年（六四九）の条に面白い記事があります。穴門国（長門国・山口県）から白雉が献上された、というのです。白い雉は瑞兆だと古くから考えられていたようですが、その様子がただごとではありません。雉を輿に乗せ、左大臣・右大臣外の高官が前後について、天皇・皇太子（中大兄皇子）に見せ、大臣が賀詞を奏上したとあります。

後に玄狐が献上されたら役人は位が上がり、捕まえた人は免税になり、罪人は恩赦を受けたという記録がありますが、この時はちょっと桁外れの騒ぎだったようです。実際、これがきっかけで「大化」は「白雉」に改元されるのです。いったい何故でしょうか。この記事は要するに、白い鳥（西）が西国から献上されたのでめでたい、ということですが、どうしてこれほど大騒ぎするのでしょうか。これも陰陽五行思想で考えると謎は解けます。

この出来事は「金氣一色事件」ということができます。なぜなら、白は金氣の色（古代中国では金属は白色と考えられていました）で、西は西を表す方位ですし、西に配置されている神獸が白虎であるように、金氣と西は同義で、まさに金氣づくしだからです。

私は当時、孝徳天皇は水氣を負う帝王、と認識されていたと思っています。それで、金氣一色の白雉を献上することで「金生水」の理により、天皇の御代は「千秋万歳に至るまで続く」と持ち上げられ、皇太子や百官に拝されたのだと思います。

これは、前回書いた、狐を（土氣）を馬（火氣）に乗せると「火生土」の理によって狐（稲荷）の威力が倍増するということと同じ考え方です。ところが実際には、孝徳天皇は

傀儡（操り人形）だったらしく、飛鳥還都を主張する中大兄は、天皇を難波長柄豊碓宮に置き去りにし、飛鳥河辺行宮に入ります。これに皇極太上天皇だけでなく、間人皇后も従い、天皇は悲嘆のどん底で亡くなります。あまりに極端すぎる話です。

孝徳天皇に対してこんなむごい仕打ちをした中大兄とは、いったい何者でしょうか。彼は皇極（斉明）天皇の長子で、中大兄に従った間人皇后はその同母妹です。一説によると、二人は近親相姦の關係ではなかったかといわれています。そのため中大兄はすぐに天皇になることを憚り、皇極が中継ぎとなって斉明天皇として重祚、悪評が静まるのを待ったともいわれています。

それはさておき、筑紫朝倉宮で斉明天皇が薨去した後、中大兄は、あれほどこだわり、しかも住み慣れた飛鳥を捨てて大津宮へ遷都しました。いったい何故でしょうか。

通説では、白村江で唐・新羅連合軍に大敗して朝鮮半島遠征が大失敗に終わり、連合軍の反攻を畏れて遷都したとされています。政治的には確かにそうでしょう。しかし、何故それが大津でなければならなかったのでしょうか。

私はこの飛鳥から北方への大移動、

すなわち大津遷都の背景にも陰陽五行思想が隠されていると思います。次にそれを説明します。

天智天皇とはほぼ同時代の、有名な高松塚古墳やキトラ古墳の壁画には、完存しているわけではありませんが、四神獣が描かれています。ですからまず大前提として、当時の皇族クラスは中国から渡ってきた最先端の陰陽五行思想を知っていた、ということがあげられます。

陰陽五行の中に、五行は循環する、という原理があります。この原理に照らせば、「金生水」の次は「水生木」になります。つまり、水気であった孝徳天皇が木気（木智）天皇を生むことを意味します。ですから天智は、先帝孝徳が水気の帝王であり、自らは木気（木智）天皇であることを自覚していたと思われまします。

そうすると、木気（木智）の命運を握るものは水です。「水生木」で水を育むものだからです。それで天智は、国家存亡の危機にあたって、飛鳥の北方にある巨大な水瓶、琵琶湖（近つ淡海）に面する大津を都に選んだと考えられるのです。

五行循環の原理によれば、次に帝位を奪った天武天皇（大海人皇子）は、「水生木」に続く「木生火」によって火気（火智）の帝王になります。これ

は常識でも分かりますが、火と水は相反するものです。陰陽五行でも「水剋火」の理があり、火気（火智）天皇である天武は、水は自身の命運を損なうものと考えたはずで、そこで、火気（火智）の方位である南方の飛鳥岡本宮（その後すぐに飛鳥浄御原宮）に回帰したというわけです。

次の帝位は「木生火」に続く「火生土」によって、土気（土智）の人物になります。皇位についたのは持統天皇です。彼女（彼女）はこれにピッタリの女帝でした。なぜなら、土気（土智）は八卦では「坤」にあたり、それに対応する家族構成は「母」だからです。

ここからは恐ろしい話です。

持統は、土気（土智）の自分が最も天皇にふさわしいと、自分の産んだ草壁皇子を殺して皇位についた、と民俗学者の吉野裕子先生は推理しておられます。「そんなバカな」と思われるのは当然です。しかし、北条政子は政治的な理由で我が子二人を殺させました。近頃は母親が子供を虐待して死なせるだけでなく、保険金をかけて殺す事件が続いています。

興味をもたれた方は『持統天皇』（吉野裕子著 人文書院刊）を読んでみてください。納得できると保証することはできませんが。

しまなみを渡って

かすみそう

六月の例会は「しまなみ海道を越えて―伊予河野氏を訪ねて―」である。早めに北口に行ったつもりが、もう十人ほども待っていていらつしやる。てんでに、四国は雨かしら、などといった空を見上げる。やがて出発。バスはしまなみを走り、やがて河野氏の土居館跡に着く。そして次は目指す恵良山城。

あまり高い山ではないそうだが、霞がかかり、ひととき目立つ山だ。何でも頂上より下二〇mはよじ登る位すこいらしい。下見に行った若い人がアゴを出したとか。

会長さん

「バスに残る人？」

と聞くと、となりの美人が一番に手を挙げる。私ももちろんである。バスに残った五人元氣よく山に向かう人に手を振る。五人を乗せたバスはふるさと館へ向かう。下見のお二人の印象がとてよかつたらしく、館長さんがつきつきり案内して下さる。五人が話に花を咲かせている頃、そろそろ下山の頃になる。何と一番に姿を見せたのは新太郎君。五人は盛大な拍手で迎える。新太郎は照れる。続々とあまり疲れた様子も

なく、皆さん下山される。リッパ。バスはすっかり青空になった美しいしまなみを走り福山に着く。

山は初めからムリだと思つて参加したが、橋や海、そして島々のきれいな花々等、いろいろと別の意味で大満足の例会だった。

皆さん有り難うございました。

『古事記』を読む

【実施要項】

《座長》平田恵彦さん（副部会長）

《開催日》九月九日（土）

《時間》午後二時～午後四時

《会場》福山市中央公民館

《会費》資料代として一〇〇円程度

歴史小説読書会

【実施要項】

読書会のねらいは歴史に関心をもち入会された会員相互の交流の一端となることを目的としたものです。

《座長》種本実さん（部会長）

《開催日》十月七日（土）

《時間》午後二時～午後四時

《会場》福山市中央公民館（予定）

《十月の課題図書》

『額田王』

新潮文庫

井上靖著
定価八〇〇円

私の近況

後藤 匡史

福山から、広島の方へ移転してから一年が過ぎました。

今、私のいる広島市東区では、地域の活性化として「二葉の里歴史の散歩道」をもっと知ってもらおうとブラッシュアップ研究協議会を組織し、企画に取り組んでいます。

駅の北口、十分ほどの所、山の麓に、軒を連ねる神社仏閣。

広島、浅野本家四十二万石。

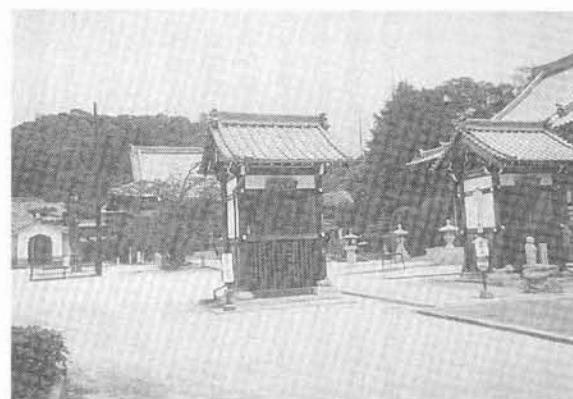
それでは、その中の一つ、広島東照宮を紹介しましょう。

東照宮と言えば、徳川家康を祀ることで有名です。今、NHK大河ドラマ、葵、徳川三代、広島の浅野氏二代、光晟の生母振姫が家康の三女だった関係から、一門をあげて建立しました。

長治は長兄でしたが、母が側室、大石の方であったところから、私は五万石でもあればよい、といって、三次に入りました。本家の歴代藩主も、三次には一目置いていたと聞きます。また、この人の娘が、あの四十七士で有名な播州赤穂五万三千石、浅野内匠頭長矩の正室、阿久里姫（瑤泉院）の父君です。

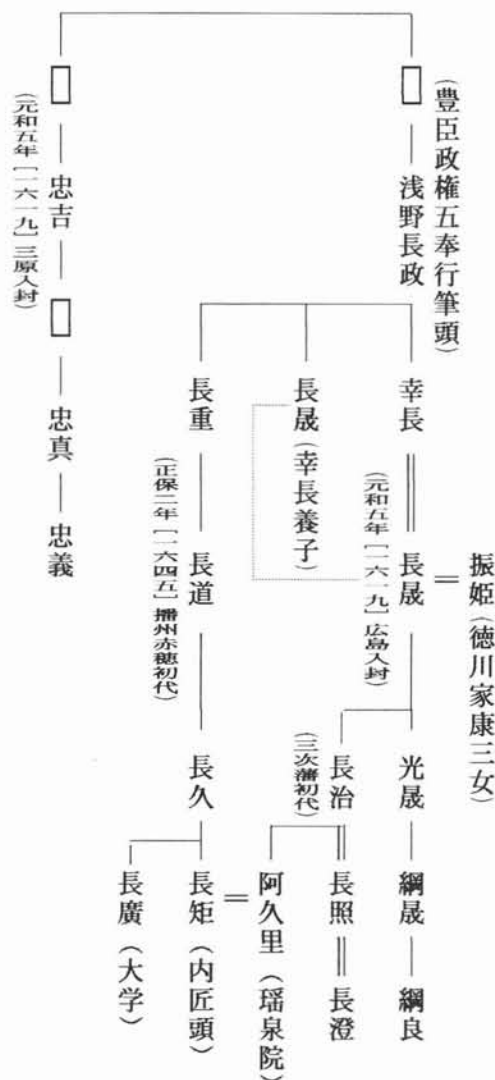


鳥居—三次浅野初代藩主長治寄進
東照宮御富前
慶安元年（1648）九月十六日
従五位下因幡守源長治



四十七士の木像を安置する明星院

浅野一門系図



浅野長治の花押

土師と古墳

平田 恵彦

九月のバス例会で探訪する岡山県長船町には「土師」という地名があります。ちょうど町役場があるあたりですが、これは古代に土師部が居住していたことを示す地名といわれています。

「土師」は古くは「はにし」と発音していたと考えられています。「は」は赤土のことで、土器製作に使われる土です。この土で焼かれた素焼きの土器を土師器といえます。「はにし」あるいは「はに」が「はじ」になり、さらに「はぜ」「はせ」などと音便変化していききました。

土師部というのは、埴輪を中心とした土師器の製作と葬送に関わった集団（品部）のことで、これを管理した氏族を土師氏といえます。わかりやすく今風にいえば、同族経営の葬儀会社の社員が土師部で、取締役が土師氏ということです。

土師部が大活躍したのは、何といても古墳時代です。ですから、「土師」の地名が残っている周辺には古墳、それも比較的大規模な古墳があることが多いのです。

長船町土師の場合もそうで、役場

の北東約一・五kmのところの花光山古墳があります。古墳の所在地は「服部」といい、これも服部（織部）に由来する古い地名だと思います。

この古墳は全長一一〇m、後円部径六六m、高さ一〇m、前方部幅五四m、高さ五・四mの前方後円墳です。葺石があり、後円部に三重の円筒埴輪がめぐっています。これは当然ですね。

珍しいのは、後円部に石室を造らず、長持形石棺が直葬されていたことで、内部には男性の一体分の骨が残っていました。石棺の前後に小さな石室が付設されていて北側石室からは内行花文鏡一面、三角縁神獸鏡一面、環頭太刀、剣、槍、刀子、銅鏃、鉄鏃、斧、やりがんな、鋸等多くの遺物が出土し、築造時期は四世紀後半と推定されています。

さらに、行政区画は備前市になりますが、花光寺山古墳に接するように新庄天神山古墳が築かれています。この古墳は全長一二〇m、後円部径約五〇m、高さ九m、前方部幅約三五m、高さ四mの前方後円墳で、やはり葺石と円筒埴輪列をもちます。埋葬施設は堅穴式石室で、刳り抜き式石棺が納められていました。変わっているのは、その蓋がなく、石室の天井石で代用していたことです。

また、石棺の北側に精巧な石枕がありました。石枕のある石棺は香川県（石清尾山古墳群等）に多く、何か関係があるのかも知れません。

昭和二二年に地元民が後円部を採掘したため副葬品の全容については不明ですが、棺内から石剣、貝剣、勾玉、管玉、鉄剣、鉄斧、鉄鏃、鉄鎌等が出土しました。築造時期は四世紀後半と推定されています。

ともに、京都大学教授だったあの梅原末治氏が調査に関わり、報告書が出版されたため、比較的早くから全国的に知られていた古墳です。

ところで、土師氏には何系統があったらしく、奈良時代になると、それぞれが朝廷に改姓を願ひ出て許されます。それが菅原氏・大江（大枝）氏・秋篠氏・百舌鳥（物集女）氏で、「土師の四腹」いわれています。

ですから、有名な菅原道真や大江広元は本来、土師氏なのです。大江季光の末裔、わが毛利元就も土師氏ということになりますが、ここまで下れば実感がありません。しかし、道真などは土師氏出身であることをはっきり自覚していたはずですよ。

一般に、土師氏の本拠地としてあげられるのは次のとおりです。

一つは藤井寺市道明寺周辺で、菅田御廟山古墳（「応神陵」）・市野

山古墳（「允恭陵」）・岡ミサンザイ古墳（「仲哀陵」）などの古市古墳群を造った集団がいた場所です。

いま行政区画としての「土師」の地名はありませんが、近鉄線の駅名や交差点の標識に「土師の里」が残っています。また、道真の叔母寛寿尼がいた道明寺は、以前「土師寺」とよばれていました。

第二に、堺市百舌鳥本町・土師町周辺があげられます。大山古墳（「仁徳陵」）・上石津ミサンザイ古墳（「履中陵」）・田出井山古墳（「反正陵」）などの百舌鳥古墳群を造った集団のいたところです。百舌鳥赤畑町には百舌鳥八幡宮がありますが、本来は、土師氏の氏神だったと考えられます。

その次に、奈良市秋篠町周辺と菅原町周辺があげられます。ここにあった集団は、五社神古墳（「神功皇后陵」）・佐紀石塚山古墳（「成務陵」）・佐紀陵山古墳（「日葉酢媛陵」）・宝来山古墳（「垂仁陵」）など七基の大型前方後円墳を中心とする佐紀盾列古墳群を築きました。

また、京都市大江は後に大江氏を名乗った土師氏の拠点だったようで、周辺に福西古墳群や杵掛古墳（「大江山陵」）＝桓武天皇の生母高野新笠の墓に治定）などがあります。

さて、長船町にいた土師部ですが、

彼らは「畿内」の本拠から派遣されてここに住み着いたのでしょうか。それとも初めからずっとこの地域に住んでいたのでしょうか。

全長一〇〇mを超えるほどの大きな古墳を造るには、高度な土木技術が必要です。ですから常識的には、そうした古墳を造り慣れていた「畿内」から土師部がやって来たと考えるべきでしょう。

しかしほくは、長船町の土師部については、もともと地元にはいた可能性があると思っています。もちろん古墳が造られたこの場所にいたとは思っていません。そこに古墳が造られるかどうか分からないのですから、ほくという地元とは、吉備出身という意味です。

何故そう考えるかというと、第一に、大きな墳丘を築く技術はもともと吉備にあったということです。たとえば、弥生末期に築かれたの樁築遺跡は、その時代、日本最大の墳丘墓でした。双方中円形をした墳丘は、復元すれば、全長八〇mにもおよぶ巨大なものです。同時期の「畿内」には大型の墳丘墓は造られていません。とにかく、吉備には巨大な墓を造る技術が古墳時代以前からあったということです。

次に、円筒埴輪のルーツは吉備の

特殊器台にあったということです。

器台は壺など容器を載せる台のことです。通常は高さ二、三〇cmほどです。特殊器台はこれが大型化したもので、高さは一mにもなり、祭祀専用に使われていました。これがヤマトに持ち込まれて特殊器台形埴輪になり、それが円筒埴輪へと発展するということはすでに定説です。円筒埴輪のルーツは吉備にあった、当然、特殊器台を焼いた連中がいたはずなんです。

さらに、長船町に隣接する備前市伊部は、日本六古窯の一つ、備前焼の里として有名ですが、釉薬をけずりに焼成する備前焼は、弥生土器の伝統を受け継ぐものです。そして忌部もまた葬送に関わる集団なのです。ここには土器作りを生業とする集団が、弥生時代からずっと住んでいたのではないのでしょうか。

こうした連中が、花光寺山古墳や新庄天神山古墳を造る際にその近くに集住し、作業をしたとは考えられないでしょうか。「畿内」だけに限らず、土器を作った人々や墓造りをした人々を各地で土師と呼んだ、そういうことではないかと思っています。そして、そうした連中がヤマト政権が成立した後、擬制的な同族関係を結んで、土師部あるいは土師氏になったのではないかと思います。

新入会員紹介

今年二月以降入会された方を紹介します。

事務局日誌

七月一日(土) 午後七時。「古墳講座Ⅷ」参加八名。

七月四日(火) 役員会参加二二名。

七月八日(土) 午後二時「古事記」を読む」参加二〇名。

七月十五日(土) 午後七時「備後古城記」を読む」参加二二名。

七月二十二日(土) 第四回郷土史講座「備後における南北朝遺文について」。

参加三六名。講師は出内博都さん。

八月一日(火) 役員会参加二二名。

八月二日(水) 掛迫第六号古墳調査報告書校正検討会。参加三名。

於ホーセン・サンデーサン。

八月一九日(土) 午後七時「備後古城記」を読む」参加二二名。

*とくに断りがない場合は会場はすべて福山市中央公民館です。

会報九七号の原稿募集

会報九七号は十月十四日発送予定原稿締切 九月九日(土) 必着

編集時間の都合で掲載できない場合がありますので早めにお送りください。原稿は一人一本に限ります。

今回は予算の都合上、二ページ以内でお願いします(依頼原稿は例外)。皆さんの会報です。身近な話題でもOK。どしどしお寄せ下さい。

転居のお知らせ

CONFIDENTIAL
備陽史探訪の会

個人情報が含まれるため掲載できません。

備前福岡・長船の

古代中世を訪ねる

―黒田氏の本貫と名刀の里を味わう旅―

九月のバス例会は歴史研の担当で、種本部長・平田副部長の黄金コンビの案内で、黒田如水の本貫、備前福岡（長船町）と備前市の史跡を探索します。この地は名刀と備前焼、そして古い歴史の里、見学する場所は盛りだくさんです。

《主な探訪予定地》

備前長船博物館：刀剣や刀剣に関する資料の展示の他、鍛刀場もある。

福岡城跡：山名教之が吉井川の中州に福岡城を構えてからここが備前の政治経済の中心地となった。現在吉井川河原にある小高い丘が福岡城の跡と伝えられる。

妙興寺：本尊は三宝尊、脇侍は四天王。応永十年（一四〇三）、播磨の赤松則興の子、日伝上人によって創建された。

黒田家墓所：黒田官兵衛孝高（如水）の曾祖父高政と祖父重高のものと伝えられる墓石がある。

宇喜多興家公墓所：宇喜多直家の父興家は福岡の豪商阿部善定の保護を受けてこの地で過ごし、天文五年（一五三六）病死した。

福岡の市跡：「一遍上人絵伝」に描

かれた「福岡の市」で有名。福岡は基盤の目のように町割りが行なわれ、道の両側には白壁や格子窓の民家が残っている。

備前福岡郷土館：大正三年（一九一四）に建てられた洋風病院の建物を利用し、福岡ゆかりの武具や生活用具等多彩な品々を展示している。

築山古墳：五世紀後半に築かれた全長八二mの前方後円墳。後円部に残されている家形石棺は九州阿蘇山の凝灰岩で作られたもの。銅鏡一面・甲冑・馬具などが出土。県史跡。

丸山古墳：鶴山（標高六一m）の山頂を整形して築造された古墳時代前期の円墳。径六〇mで、周囲には埴輪が立てられ、出土遺物が多く国史跡に指定されている。

須恵古代館：長船町西須恵・東須恵には築山古墳に代表されるように多くの古代遺跡があり、そこから出土した遺物を展示している。

備前南大窯跡：室町時代から境・京都の茶人が珍重した茶器が大量生産され、陶工たちが大窯を築いて大量生産したその跡である。国史跡。

真光寺：報恩大師が建立した備前四十八ヶ寺の一つと伝えられる。本堂（国重文）はたいへん立派で、「永正十三年（一五一六）」銘の棟札がある。また三重塔（国重文）も中世建

築で、もとは牛窓の蓮華頂寺にあったが移築されてここにある。

★以上はあくまでも予定です。最終下見の結果、変更・削除する場合があります。

《実施要項》

日程 九月一七日（日）★雨天決行
集合時刻 午前七時四十五分（厳守）
五〇分には出発します

集合場所 福山駅北口（福山キャッスルホテル前）

参加費 会員 四二〇〇円
一般 四七〇〇円

（博物館入館料・傷害保険料・資料代含む）

募集人数 四八名（申し込み先着順）

★ただしあと九名、つまり五七名までは補助席で受付します。

講師 種本実さん・平田恵彦さん
申込 事務局に電話で。現在受付中。

★最近、当日のキャンセルが増えていきます。キャンセルは遅くとも前日までにご連絡ください。そうすればキャンセル待ちの人が一人でも多く参加できるのです。

その他 弁当と飲料を持参してください。帽子・歩きやすい服装・靴でご参加下さい。今回は歩く距離がそれほど長くない、どなたでも参加できます。

広島県立歴史博物館特別展

江戸モード大図鑑

―小袖文様にみる美の系譜―

広島県立歴史博物館が「日本最高・最大級の江戸コレクション展 江戸モード大図鑑」と銘打って八月十日（木）から十月九日（祝）まで特別展を開催しています。

県博には日頃からお世話になっていきますので、このたび会としても前売券の販売に協力することになりました。今後、備陽史探訪の会の行事で販売していきますので会員の皆様のご協力をお願いします。

なお、前売券購入希望の方、知人友人に売ってくださる方、販売に協力してくださる方があれば、事務局に電話でご連絡ください。

《関連講演会》

演題 「江戸時代のきもの―江戸モードは京都から―」

講師 河上繁樹氏

（京都国立博物館工芸室長）

期日 九月二三日（祝）

時間 午後二時から

会場 広島県立歴史博物館講堂

会費 無料

みんなで備陽史探訪の会創立二十周年記念行事を大成功させよう！

事務局員一同

記念すべきミレニアムの年、私たち備陽史探訪の会は創立二十周年を迎えることができました。

昭和五五年、田口会長が友人十数名と始めた会は二十年を経て、いま会員数約三百名を擁する、全国でも有数の歴史愛好会に成長しました。これもひとえに会員一人ひとりの皆様のご支援があつてのことと感謝いたしております。

さて、すでに年度当初から、例年以上の充実した企画を組み、さまざまな行事を実施してまいりましたが、いよいよこの十月二日、一連の記念行事の中でメインとなる、創立二十周年記念特別講演会と記念祝賀会を迎えることになりました。

記念講演会には日本中世史の権威、岸田裕之先生をお招きし、「備陽地域における戦国時代の城と合戦」と題してご講演いただくことになっております。きっと素晴らしい講演になるうと心待ちにしている次第です。

ただ、心配事があります。それは、「講演は素晴らしかったけれども、会場は一杯にならなかった」になりはしないかということです。

十周年記念講演会の際には、定員三〇〇人の県博講堂に人があふれ、別室にモニターまで用意したほどの大盛況でした。

当時、会員数は約一五〇人、そのほとんどが会場に足を運んで下さったようです。いま会員数は三〇〇人ですが、ここ数年の講演会で別室にモニターを用意したことはありませんでした。二十周年記念講演会がこれでは困ります。しかし、会員三百人全員が会場に足を運んで下されば、県博講堂は満員、それだけで大成功となるのです。

また、講演会後には記念祝賀会を準備しております。会場は福山グラウンドホテルですが、できるだけ多くの皆様にご参加いただけるよう、参加費の面でも、アトラクション等の企画の面でも役員会で検討を加えております。これについては九月行事案内に掲載させていただきます。詮ずるところ、記念講演会の成否も、祝賀会が盛り上がるかどうか、すべて「数」にかかっています。会員の皆様のご協力を切に願う次第です。

大富山城に攻め登る

久代宮氏の本城を味わう

十月のバス例会は、久代宮氏が拠った本城、大富山城に登ります。山城ファンが泣いて喜ぶ見事な山城で、本丸側がとくに有名ですが、このたびは南側の大規模な出丸にも登ります。大堀切で断ち切られた南側の出丸は、本丸とはまた違った面白さがあり、実に多くの遺構が残っています。今回は大富山の金山くまなく堪能していただきます。まだ登ったことのない方はこのチャンスを見逃さないで下さい。

大富山城：大富山城は周囲が見上るばかりの天険で、とくに東・西・南側は壁のようにそそりたち、しかも東から南にかけて西条川が流下し、北はこれに注ぐ入江川が天然の濠を形成している。

「久代記」の表現を借りれば、「峯高くして白雲山腰にかかり東の麓へは雲伯の境より流れ出づる大河あり。南の尾崎は山五町計出で鯉の如く鳥ならでは通ふものなし」という堅固な要害で、山頂には約二〇〇〇㎡の広大な本丸がある。

浄久寺：この寺は宮氏の菩提寺で、

一族の墓がある。備後北部の巨利徳雲寺の二世鼎庵宗梅が宮高盛を開基として建てた寺である。大富山城主三代宮上総介景盛、宮家の家老山城守盛勝、浄久寺三世覚海禪師、以上三幅の寿像が所蔵されている。

《実施要項》

日程 十月一日（日）★雨天決行

集合時刻 午前七時四十五分（厳守。八時には出発します）

集合場所 福山駅北口（福山キャッスルホテル前）

参加費 会員 三七〇〇円

一般 四二〇〇円

募集人数 四八名（申し込み先着順）

★ただしあと九名、つまり五七名までは補助席で受付けます。

講師 小林浩二さん・矢野恭平さん

申し込み 事務局に電話で。

受付開始日 九月一日（金）

その他 弁当と飲物をご持参ください。また、山歩きのできる服装・靴でご参加下さい。大富山城は備北を代表する山城で、城の規模が大きく、一部急なところもあるので、やや健脚な方向きです。

★雨天の場合は別コースになります。もし時間が余れば、西城町歴史民俗資料館、爾比都神社、蟻腰城等を訪れます。

創立二十周年記念特別歴史講演会

備陽地域における戦国時代の城と合戦

主催 備陽史探訪の会

共催 広島県立歴史博物館

創立二十周年記念講演会にふさわしい講師を迎えることができました。当日は会員で満員にしましょう。

【実施要項】

《期日》十月二一日(土)

《時間》午後二時開演(四時終了)

《会場》広島県立歴史博物館講堂

《会費》無料

《講師》岸田裕之先生

(広島大学文学部教授)

【講演内容の概要】

歴史研究では、対象とする事象の時代性と地域性を明らかにすることが求められます。

この講演では、戦国時代から豊臣期における備陽地域を対象にし、一に戦国時代の城の立地と交通・流通の関係を指摘して、この時代の戦争が広域化しつつあった流通経済権益の争奪戦であったことを明らかにします。また二に、毛利氏の「八箇国御時代分限帳」を分析し、豊臣秀吉の朝鮮侵攻に対応して毛利氏領国ならびに地域社会の中世的秩序が変革されていく有様を考えます。

第九回郷土史講座

月の輪古墳について

月の輪古墳は、岡山県久米郡柵原町飯岡字倉見の太平山山頂に築造された大型の円墳です。

直径約六m、高さ約一〇m、頂上平坦部の径約一七mで、斜面の中ほどに約一mの段をめぐらし、北側には造り出しをもっています。

この古墳は、昭和二八年(一九五三)八月から二月にかけて、村民・研究者・教師・生徒が一体となって発掘調査を行い、学問上だけではなく、教育の上でも、住民運動の上でも非常に大きな成果と問題を投げかけました。その発掘と発掘運動を描いた記録映画「月の輪古墳」は全国的に大きな話題を呼びました。

十一月の「秋の古墳めぐり」では、この「伝説の古墳」を中心に周辺の古墳を探訪しますが、今回はその予習をかねて網本さんにお話しいただきます。

【実施要項】

《期日》九月三〇日(土)

《時間》午後二時から

《会場》福山市中央公民館

《参加費》資料代(一〇〇円程度)

《講師》網本善光さん

(古墳部会副部会長)

『備後古城記』を読む

【実施要項】

《座長》小林浩二さん(部会長代行)

《開催日》九月二六日(土)

十月二四日(土)

★都合により十月は日程を変更します。ご注意ください。

《時間》午後七時～午後九時

《会場》福山市中央公民館

《会費》資料代として一〇〇円程度

古墳講座Ⅶ

【実施要項】

《座長》山口哲晶さん(部会長)

《開催日》九月二三日(土)

★九月から第四土曜日でです!

《時間》午後七時～午後九時

《会場》中央公民館会議室

《会費》資料代として一〇〇円程度

【編集後記】

今年の夏は蒸し暑い!気温は例年並みだと思いますが、湿度が異常に高いのではないのでしょうか。お互い体を壊さないよう気をつけましょう。

バス例会、九月から再開です。ぜひ参加して下さい。(磐座亭主人)

備陽史探訪の会事務局 ☎七〇〇六四

福山市多治米町五一一九一八

☎〇八四九(五三)六一五七